

母<sup>ぼ</sup>つねをはじめ、十人兄弟の大家族でしたが、しつけがきびしく、家の中がさわがしいということはありませんでした。

五郎は「近年<sup>きんねんごろう</sup>五郎」と母が呼んだほど、近年めずらしくおとなしい子供でした。しかし母のしつけはきびしく、寒い時でも手をふところに入れることは許<sup>ゆる</sup>されず、また暑くてもはだぬぎになることを許されませんでした。お金の使い方にもきびしい心得<sup>こころえ</sup>があつて、年に一度の諏方<sup>すわ</sup>神社<sup>じんじや</sup>のお祭りのときも、買物の代金を自分で直接払うことは許されず、かならず財布<sup>さいふ</sup>のまま商人に渡してつてもらわなければなりませんでした。

運命の日、八月二十三日（慶応<sup>けいおう</sup>四年）を、五郎は面川<sup>おもがわ</sup>沢村<sup>さわむら</sup>のおばの家でむかえました。この日に若松城下で起つた数々の悲惨<sup>ひさん</sup>なできごと、そしてわが家の悲しいできごとについては、五郎はまだ何も知っていませんでした。この日の